

世界遺産登録の取り消し

近藤 節夫

今年6月ユネスコ「世界遺産委員会」は、ある世界遺産の登録を取り消した。取り消し決定までには紆余曲折があったが、登録抹消というのは極めて稀でこれが僅か2例目である。

最初の登録抹消の際は、これほど大騒ぎにはならなかった。というより、その時はそれほど世界遺産ファンから注目も同情もされず、いわば愛想を尽かされた感じだったのである。今度の取り消しのケースは、国内はもとより世界中のファンが嘆いた登録抹消だったのである。

では、この二つの登録抹消の間にはどのような違いがあったのだろうか。

一昨年の最初の登録抹消はアラビア半島オマーンにある「動物保護区」である。1994年に登録されたこの動物保護区では、世界的に珍しいアラビア・オリックスが絶滅の危機に瀕していた。登録時には450頭が生息していたが、その後減り続け登録抹消時点で65頭にまで減ってしまった。その原因は土地開発による石油資源の掘削と密漁である。何と保護区用地の90%をオマーン政府が国家事業として堂々開発したのである。世界遺産委員会が目指す、世界的に珍しい絶滅奇種の保護の逆を行ってしまった。オマーン政府は自国の開発と利益を優先した確信犯だったのである。そこには自然保護や文化遺産尊重の理念のかけらも感じられない。すぐさま世界遺産登録の取り消しとなったのは当然の成り行きであり、どこからも同情の声は聞かれなかった。

一方今回登録抹消となった「ドレスデン・エルベ渓谷」は、取り消し決定までの間苦悩に揺れ動いた。中世よりエルベ川沿いに素晴らしい景観を誇っていたドレスデンが第二次世界大戦の災禍で灰燼に帰し、戦後見事に戦前の街を復興させたことに、世界中の人びとが喝采を送った。だが、畏敬の眼で見られたドイツ人魂が、現代文明の攻勢の前にもろくも屈服してしまったのである。2004年に登録された世界遺産は、僅か5年の短命に終わった。

取り消しの理由は、街を貫くエルベ川に巨大な橋梁をかけることが、景観を大きく損ねるといったものだった。橋は朝夕の交通渋滞解消のための迂回路として、早くから計画されていた。ユネスコは橋の代わりにトンネルを建設して、景観を保護するという代替案を提案したが、膨大なコストがネックとなった。悩みぬいたドレスデン市は、最終的にその決定を住民投票に委ねた。その結果、市民は伝統的な美的景観よりも日常生活の利便性を選択し、自然保護派と世界遺産委員会は涙を呑んだのである。

この現実には現代に難しい課題を提起している。確かに世界遺産は素晴らしい。これを後世に残したいとの尊い気持ちは誰しも心の奥底に持っている。しかし、現実にはどこまでその気持ちを持ち続けられるか、また強い気持ち以上にその保全・維持のために費用をどこまで負担しきれるのか、との課題は現代人に突きつけられた両刃の刃である。

浮かれて遺産登録したまではいいが、引き続き貴重な自然・文化遺産を保護しようとの真摯で強い気持ちがなくては、結局元も子も失くしてしまうのではないかと、年々盛んになる「世界遺産ブーム」が心配でならないのである。